

自分の進路選択を振り返る

小林 英津子(工学部)

人生歩むうえで、進路選択をしなければならないタイミングはいくつかあると思います。そのような時に自分が何を考えていたか。今思い起こすと、20－30年後の自分を描き、それに向かって進路選択したことはほとんどありません。私自身は今、治療を支援するロボットの研究を行っていますが、子供のころからロボットが大好きでロボット工学博士を目指したわけでもないですし、医師を目指していたわけでもありません。正直、都度その時の自分に置かれた状況と短期的な興味に基づいて進路選択をしてきました。夢に向かって努力し、その結果道を切り開いていくことは非常に素晴らしいですし、いまでもそのような人生に憧れがあります。

結論から申しますと、必ずしもそのような“夢”がなくても、不安に思う必要なく、振り返ってみて満足な人生だったといえそうです。ただし、それにはちょっとしたコツが必要だと思います。私の考えるコツは以下です。

- ・目の前のことに真摯に取り組むこと
- ・後悔があったとしても、今の自分へのプラスの影響を考え納得すること

自分の経験を徒然に書かせていただきます。ご興味があればお読みください。進路選択に迷われている方の参考になれば幸いです。

さて、私も多くの高校同様、高校生3年生進学時に理系文系を選択することになりました。数学・物理が好きで漢字と社会が苦手、ということで迷わず

理系に進学し、専門分野が定まらない理科一類に入学しました。その後、進学選択になるわけですが、この時も自分の職業と関連付けて学科選びはしませんでした。当時（高校生から大学1年生ころまで）はバブル期、多くの理系学生が銀行・商社・証券会社に就職していましたので、自分の学ぶ分野と就職する分野は別だと考えていました。進学選択で選択したのは精密機械工学科（現精密工学科）です。

ではなぜ精密機械工学科を選んだのか、ということになるのですが、ロボットに多少の興味があったということからです。精密工学科は「精密さ」をキーワードに、機械工学・電気電子工学・情報工学・材料工学・医用工学など、幅広い工学分野を融合した学際的な教育・研究を行っている学科です。ロボットの基礎が学べること、社会との接点をベースに様々な工学技術が学べる、という大ざっぱな理由で精密機械工学科に進学しました。

次の選択は卒業論文の配属研究室選びです。これについてもロボットの研究を行っているいくつかの研究室から、社会との結びつきが強い医療用のロボットの研究をしている研究室を選択しました。今から思うと、これまで勉強したことを目に見える形で社会に還元したいという気持ちが潜在的にあったのかもしれない。卒業論文テーマは脳神経外科手術支援用の術具を位置決めするロボットの開発でした。特殊環境（高磁場）での高精度な位置決め装置の設計は、これまで教科書で習ってきたことを実践するという観点で非常に新鮮な体験でした。開発したものの評価においても、演習授業のように評価手法が用意されておらず、妥当な計測手法を様々な文献を元に考えることでも多くの学びがありました。

さらに、異分野の研究者（医師）との共同研究にも大きな魅力を感じました。お互いの価値観が異なるところから、理解の溝を埋め、同じ目的（つまり具体的な研究テーマ）へと設定することは、勉強だけではなく、コミュニケーション能力や行動力が重要であることを学びました。明文化・定式化されていない共同研究者のニーズを、言動から導き出すことは、文理関係なく今までの知識を総動員して行う必要がありました。これは、東大に進学してから授業面では劣等感を抱いていた自分にとっても大きな励みとなりました。もう一点、共同研究者の医師が工学オタクだったことも衝撃でした。ご自身の机には工具が取り揃えており、自分で装置も作ってしまう先生でした。医師は医療、工学者は工学と線引きすることなく、自由に分野をまたいで学ぶ姿勢を学びました。

そういうわけで、課題解決型の異分野共同研究にすっかり魅せられて、大学院まで進むこととなりましたが、次の選択は就職でした。私はサラリーマンの父親の家庭で育ちましたので、両親からは企業に就職することを期待されていました。しかし当時、治療支援ロボットを行っている企業はなく、そのまま大学院博士課程に進学しました。その後アカデミアに残ったのもほぼ同じ理由です。おそらく、今のよう手術ロボットを開発するベンチャー企業があれば迷わず就職していたと思います。さらに、女性は結婚したら家庭に入るというプレッシャーも当時は多少ありました。ならばできることまでやってみたいことをやろう、と考えあまり将来のことは考えず、大学で手術ロボットの研究をつづけることとし、結局仕事を辞めることはしませんでした。

しかし、働き続けること、アカデミアを選択したことを後悔したことは多々あります。実力主義の世界で、子育てとの両立は大変です。ハード面では同僚や家族、地域の人々などに助けられ、何とか耐えました。感謝しかありません。一方ソフト面は厄介です。大学では他者と比べて研究に十分な時間をとれていないと感じること、家に帰ると子供に十分な時間をとれていないと感じること。つまりどちらにいても、中途半端と感じることが一番つらいことでした。これに関しては、ダイバーシティに関する先達の講演会や本、同じ境遇の友人との愚痴の言い合いでヒントを得て乗り越えました。自分の社会経験が子育てに役立つこと、育児との両立の困難を経験したことが研究への取り組み方や組織運営にも大いに役立つことが分かりました。

今は工学から治療を支援するという観点で、引き続き医療の課題抽出とシステム開発の研究を行っています。また自分と同じような苦悩をもつ若手を少しでも支援できたら、という気持ちがあり、工学系男女共同参画委員会委員長もさせていただきました。

小さな動機で進路選択してきましたが、卒論をきっかけに医用工学にはまり、後悔しながら進んできたアカデミアも、その思い自体が自分の財産だと感じています。そういうわけで、月並みではありますが、目の前のことに真摯に取り組むことで道が開けると考えています。ちなみに、子供がある程度成長した現在、増えた自由時間は、自分へのご褒美だと思い、大切に活用しています。